

児童文学からへ未来へ⑤

岡田淳とファンタジーの可能性

井上乃武

1 「失われた可能性」

岡田淳について考えるうえで、一九八〇年代から一九九〇年代にかけて書かれた『扉のむこうの物語』（理論社、一九八七）『選ばなかった冒険』（偕成社、一九九七）が内包する問題がどれくらい重要なのかということは、じつははっきりしない。これらの作品は、ファンタジーが抱える二つの問題——「ファンタジーの恣意性」「ファンタジーと現実の関係」——に真正面から取り組んでいた。前者は、ファンタジー（世界ないしは物語）を作り出すことがファンタジー世界の住人に対する抑圧となり得ることに対する批判もしくは「忸怩たる思い」を反映し、後者は、そのようにして作られたファンタジーが「現実」とどう関わるのかという問題意識と密接にリンクしていた。

このテーマは、先行する『二分間の冒険』（偕成社、一九八五）などで提示されたモチーフを承ける形で展開されている。『扉のむこうの物語』は、ファンタジー世界の創

造と物語（フィクション）の創作を重ね合わせつつ、この二つの行為がそれによって創られた者たちを支配する病理を、それに対して主体性を求めるファンタジー世界の住人ないしは物語の登場人物とのせめぎあいとともに描き出している。この創造行為の病理は、それが大人によってコントロールされていることと表裏になっており、その意味で『扉のむこうの物語』は、大人による子ども支配という「現実」に対する批判となっている。

一方、『選ばなかった冒険』は、主人公たちが通う小学校の関係者がテレビゲームの世界に入り込む、という設定を通して、「現実」の問題をより明確にあぶりだす仕組みになっている。具体的に言えば、このゲームの世界において、大人たちは主体性を持たないキャラクターに、一部の目立つ生徒（流行りの表現を使えばスクールカーストの頂点近くに立つ生徒）はゲームの主人公プレイヤーに、それ以外の生徒はモンスターや敵の兵士ゲームのキャラク